

出題の意図・解答例

1 出題の意図

(1) 漢詩・漢文

比較的よく知られた『莊子』に見られる寓話「胡蝶の夢」(A)について、その主張・論理構成をどのように理解しているかを問う問一は、『莊子』の文章(B)を手掛かりとして自分の考えを論理的な文章として適切に表現できるかを見る。

問二では、「胡蝶の夢」から自らが汲み取った主旨を踏まえ、「夢」と「現実」がどのような関係なのかについて考察した内容を論理的に文章化できるかを問う。可能であれば問一に対する解答から問題意識を発展させた内容が望まれるが、自由に発想を展開する内容の記述でも可とする。

出題意図の中に、中国古典に関する知識の有無を問うことは含まれないが、普段から中国古典に親しんでおりその内容に関して考察した経験がある受験生を期待するという意図は含まれる。

(2) 論語

孔子には多くの弟子がいたが、その中でも優れた弟子とされる「孔門十哲」のうち、季路(子路)と冉有(冉求)に対する孔子の対応の違いから、師匠の気持ち、弟子の気持ち、教育のあり方などについて、文章を読んで考えたことを小論文にまとめてもらい、読解力や論理的思考力、表現力を問う出題である。孔子や『論語』、ひいては儒学／儒教、また漢文訓読についての知識を求めるものではないが、本文中に『論語』の原文とその書き下し文が引用されているのは、中国古典や漢文訓読に対して親しみを持っている受験生の出願を期待しているものである。

問一は、師匠の立場に立ち、異なる弟子からの同じ質問に対してどうして異なる回答をする必要があるのかを考えてもらう設問である。本文に二人の弟子の性格やそれに対する著者の解釈が記されているので、それらを読み解く力と手際よくまとめる文章表現力を問う設問である。問二は、本文で消極的と評される弟子の冉有の立場に立ち、孔子からの言葉をどう受け止めるかを問う設問である。受験生も学校や家庭において目上の人から厳しい指導、中には向き合いたくない自らの欠点に対する鋭い指摘を受けることもある。そうした経験も踏まえて、自分ならどう返答するかを問う。

(3) 三国志

三国志には史実においても物語においても、人物の言行の是非について古来議論の絶えないものはいくつかあるが、出題した劉備臨終場面における諸葛孔明への遺命もその一つである。劉備の息子に素質があれば彼を支え、素質がなければ孔明が代わって帝位につい

てほしいという「頼み」は、孔明にしてみれば究極の選択を迫られるものである。三国志に関する知識の有無にかかわらず、究極の「頼み」や究極の選択についての自身の考えを小論文にまとめてもらい、読解力や論理的思考力、表現力を問う出題である。

問一は、どうして劉備が孔明にかかる「頼み」をしたのかを、劉備の立場から考えてもらう設問である。AやBの引用の中から劉備の考えを読み取って推測してもらいたい。問二は、劉備の「頼み」を受けた孔明の立場に立って、自分ならどうするかを考えてもらう設問である。提示した場面の後の展開を想像して解答してもよいし、自分の経験を踏まえてどのような選択を下すべきかを解答してもよい。また、どちらの設問も、三国志に関する知識があれば、それに基づいて解答してもよい。

2 解答例

(1) 漢詩・漢文

問一

(例①)

莊周と蝶は、Bの内容を参考にするならば「われ」と「かれ」の関係と言えるのではない。いか。莊周が「われ」の視点から、蝶である「かれ」の立場から見た場合の景色を夢に見たのだろう。莊周が蝶となる夢を見た、とするならば、莊周こそが「ここ」となり、蝶は、「あちら」となる。それは蝶も同じように自身のことを「ここ」、莊周を「あちら」と認識するだろう。私はこの関係は動かすことのできない、「かれ」があるからこそ生まれた、対立の関係であると考え。莊周と蝶は、夢という概念によって対立している、という点もある。彼らは区別のある物体なのだ、という認識を持つこともできるだろう。

(例②)

胡蝶の夢は、現実世界で確立した自己だと思っている主体(莊周)も、実は夢の中の主体(胡蝶)と相対的な関係である可能性を示している。つまり、もしかしたら胡蝶としての存在が現実で、人間莊周が夢の中の仮象であるかもしれないのだ。そして、Bによればそのような関係は、単なる存在の相対性を指摘するだけでなく、どちらかが正しくどちらかが間違っているということさえ決定できないという不可知性をも主張していると思われる。Aでは莊周の世界と胡蝶の世界とは明確に区別が存在することが述べられ、両世界間の移動を物化として示していることからすれば、一つの主体の中に自由に往来できる二つの主体・世界が存在する可能性を示していると思う。

問二

(例①)

私は、「夢」と「現実」というのは絶対に交わるものがない、対立した存在であると考え。『夢』は自身の想像から生み出されるものだと思う。なので私はAは莊周と蝶のどちらかが、絶対に叶うことのない想像をした話であると解釈した。夢と現実というのは、明確な区別があつてこそ、概念として存在することができるのだ。こういった、明確に判断す

ることのできる対立関係というのは、物事を形成していく段階でとても大切になると思う。夢と現実、のみでなくとも、自身と相手、などの違いがしつかりと存在することで、概念が成り立ち、関係性を構築するための大切な一手となるのだと私は考える。対立の存在は必要である。

(例②)

胡蝶の夢の寓話は、現実の確固とした自己と儚い夢の中の自己という常識的見方に再考を促す、「現実」の相対性を指摘した興味深いものだ。立ち位置や力点を変化させれば、主体の認識や是非の判断も容易に逆転するし、世界そのものの在り方への意識が大きく変化することを教えてくれる。それは、固定的な立場に固執するのではなく、自由に立ち位置を変化させることで物事の価値判断を自由に変更できる可能性を示している。通常は覚醒時を「現実」としているが、その都度異なる世界を示す「夢」の多様性を考えれば、実は一人の「私」に複数の異なる主体や世界が内在しているとも考えられ、多様で自由な自己展開の可能性がこの寓話から読み取れる。

(2) 論語

問一

積極的な性格の季路は、よく考えずに行動して失敗する傾向があるのではないか。そのため孔子は父兄の存在を意識させて慎重に行動するよう諭したのだと思う。一方、消極的な性格の冉有は、言い訳ばかりで行動しないようである。そのため孔子はとにかくまず動くことを促したのだと思う。一律の教え方をするのではなく、弟子それぞれの性格に合わせて教える教育者だからこそ、孔子は弟子によって違う回答をしたのだと思う。

問二

孔子から「力足らざる者は、中道にして廃す。今女は画れり」と言われたら、私は恥ずかしくなると思う。謙遜する気持ちから「力足らざるなり」と言ったつもりでも、孔子には行動したくない自分への、自分でも意識できていない言い訳であることを見破られたからである。

私も似たような経験がある。フアンになった中国人アイドルが来日すると聞き、中国語で話しかけたいと中国語を独学で学ぼうとした。しかし、中国語の発音は日本語との違いがかなり大きいことを知り、自分の能力では無理だとあきらめてしまったのである。

今思い返せば、まだ始めてもないのにあきらめたことは、この冉求と同じである。始めてみたら意外とできるかもしれないし、仮に最初は苦労したとしても、がんばって続ければ乗り越えられるかもしれない。だから、今の私が冉求の立場だったら、「先生のおっしゃる通りです。自分の力を信じてできるところまで前進してみます」と答えたい。

問一

劉備の言葉の中に「朕は丞相を得て幸いにも帝位をきわめることができた」とあり、自分が皇帝になれたのは孔明のおかげであって、孔明がいなければ自分の成功はなかったと考えていることが読み取れる。また、それに続けて「己の浅はかさから丞相の言葉を聞かず、かかる惨敗をみずからもとめてしもうた」とあり、孔明の進言を聞き入れていれば、負けることも病を得ることもなく、後悔することはなかったと考えていることも分かる。言い換えれば、孔明の判断の正しさを身をもって認識したということである。自分を成功に導いてくれたかけがえのない存在であり、正しい判断力の持ち主だからこそ、劉備は孔明にこのような「頼み」をしたのだと思う。

問二

私が孔明だったら答えに迷うと思う。私は高校で野球部に所属していたが、最後の夏の大会を前にキャプテンが大けがで入院してしまい、私が彼から指名されてキャプテンの座を引き継いだ。しかし、私には彼ほどのリーダーシップはなく、チームも一回戦で敗れた。ばらばらになりがちなチームを強い統率力とカリスマ性でまとめ上げていたキャプテンの後を引き受けることは難しい。この経験を踏まえて考えれば、劉備の息子に素質がないからといって、代わりに皇帝になることにはためらわざるを得ない。一方、当時のキャプテンと同じように、劉備も孔明の実力を認めている。その期待に応えなければという思いもないわけではない。だから返答には迷う。